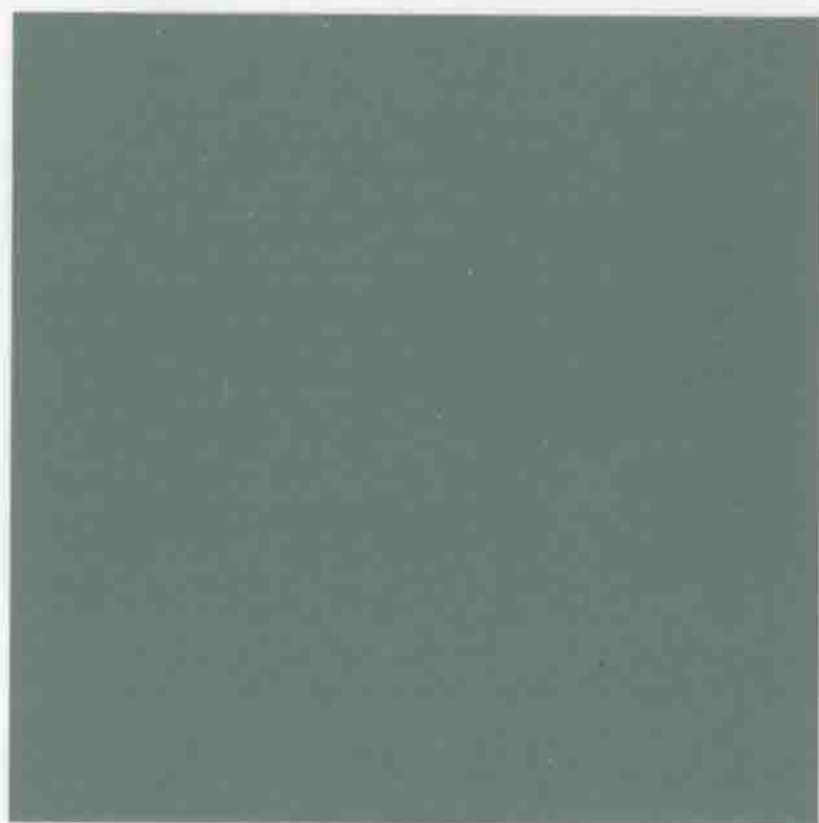


# 宣教師ニコライとその時代

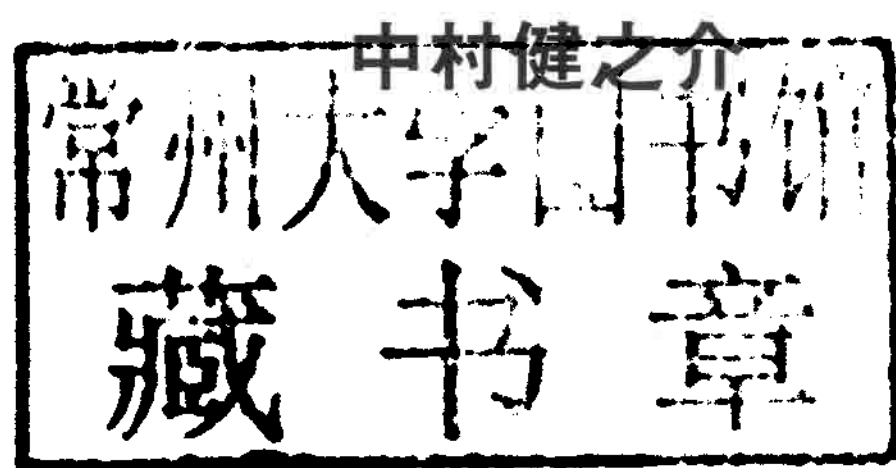
中村健之介



講談社現代新書

2102

# 宣教師ニコライとその時代



講談社現代新書

2102

講談社現代新書 2102

# 宣教師ニコライとその時代せんきようし

二〇一一年四月二〇日第一刷発行

著者 なかむらけんのすけ 中村健之介 © Kennosuke Nakamura 2011

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 112-8001

電話 出版部 〇三―五三九五―三五一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕(日本複写権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複写権センター(〇三―三四〇一―二三八二)にご連絡ください。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



N.D.C.198.19 350p 18cm

ISBN978-4-06-288102-9

■ 目次

はじめに 9

第一部 布教者ニコライ

第一章 激動の日本へ 16

- |   |                                 |    |
|---|---------------------------------|----|
| 1 | 单身、東に                           | 16 |
| 2 | 宣教の開始——幕末維新期の箱館で                | 29 |
| 3 | 「かくれ正教徒」となった大名家の女性たち——水沢藩留守家の場合 | 48 |

第二章

活動資金に悩みつつ

65

1 頼みはロシアからの宣教資金

65

2 東京に大聖堂を！

74

3 すべては主教の肩に

86

第三章

意志の人

98

1 有志義会事件

98

2 強烈な責任感

114

3 「神聖なる喜劇」

124

第二部

観察者ニコライ

文学者へのまなざし

138

- 1 ドストエフスキーとのすれちがい 138
- 2 プーシキン の偶像化をめぐって 149
- 3 ソロヴィョーフ——「修道士志願」から「背教者」へ 161

あまりにもロシア的な

177

- 1 チェーホフ ばりの観察眼 177
- 2 クロンシタートのイオアンとトルストイ 188
- 3 府主教アントニイと革命 203

日本、にしひがし——各地布教の旅日記

215

- 1 初めて共同の浴場に入った——北海道から関東へ 215

第三部

日露戦争とその後

- 2 ここには日本の根がある——中部から京阪、山陰へ 229
- 3 鹿児島弁はすぐにはわからない——広島から四国、九州へ 235

第七章

ひとり東京に残って

248

- 1 「露探」の頭目 248
- 2 戦時に痛感する日本人とロシア人の違い 256
- 3 ユダヤ人、革命的インテリゲンツィヤ、慰霊 264

第八章

晩年の苦悩

279

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 宣教資金の枯渇と後継者問題 | 279 |
| 2 | 批判の噴出         | 292 |
| 3 | 教会の経済的自立をめざして | 299 |

## 第九章

### ニコライの信仰

305

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 死後の生、たましいのゆくえ | 305 |
| 2 | 神と自然          | 316 |
| 3 | 永眠            | 325 |

|      |     |
|------|-----|
| あとがき | 340 |
|------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 人名・文献索引 | 350 |
|---------|-----|

# 宣教師ニコライとその時代

中村健之介

講談社現代新書

2102



■ 目次

はじめに 9

第一部 布教者ニコライ

第一章 激動の日本へ 16

- |   |                                 |    |
|---|---------------------------------|----|
| 1 | 单身、東に                           | 16 |
| 2 | 宣教の開始——幕末維新期の箱館で                | 29 |
| 3 | 「かくれ正教徒」となった大名家の女性たち——水沢藩留守家の場合 | 48 |

第二章

活動資金に悩みつつ

65

1 頼みはロシアからの宣教資金

65

2 東京に大聖堂を！

74

3 すべては主教の肩に

86

第三章

意志の人

98

1 有志義会事件

98

2 強烈な責任感

114

3 「神聖なる喜劇」

124

第二部

観察者ニコライ

文学者へのまなざし

138

- 1 ドストエフスキーとのすれちがい 138
- 2 プーシキン の偶像化をめぐって 149
- 3 ソロヴィョーフ——「修道士志願」から「背教者」へ 161

あまりにもロシア的な

177

- 1 チェーホフ ばりの観察眼 177
- 2 クロンシタートのイオアンとトルストイ 188
- 3 府主教アントニイと革命 203

日本、にしひがし——各地布教の旅日記

215

- 1 初めて共同の浴場に入った——北海道から関東へ 215

第三部

日露戦争とその後

- 2 ここには日本の根がある——中部から京阪、山陰へ 229
- 3 鹿児島弁はすぐにはわからない——広島から四国、九州へ 235

第七章

ひとり東京に残って 248

- 1 「露探」の頭目 248
- 2 戦時に痛感する日本人とロシア人の違い 256
- 3 ユダヤ人、革命的インテリゲンツィヤ、慰霊 264

第八章

晩年の苦悩 279

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 宣教資金の枯渇と後継者問題 | 279 |
| 2 | 批判の噴出         | 292 |
| 3 | 教会の経済的自立をめざして | 299 |

## 第九章

### ニコライの信仰

305

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 死後の生、たましいのゆくえ | 305 |
| 2 | 神と自然          | 316 |
| 3 | 永眠            | 325 |

|      |     |
|------|-----|
| あとがき | 340 |
|------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 人名・文献索引 | 350 |
|---------|-----|

## 【凡例】

①ニコライの日記のロシア語原文の全体は、「Дневники святого Николая Японского в 5 томах под редакцией Кэнноскэ Накамура」（中村健之介編『聖・日本のニコライの日記』全五巻）に収められている。これは、サンクト・ペテルブルグのギペリオン社から、二〇〇四年に刊行された。

右のロシア語版の日本語全訳（十九人の訳者による）が、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』全九巻である。これは、東京の教文館から、二〇〇七年に刊行された。ロシア語版と日本語版の出版には、日本財団による助成があった。

②本書のニコライの日記本文は、すべて右のロシア語版からの、中村健之介による訳である。なお、数字の表記等は、全体の読みやすさを考え、新書の規準にしたがってあらためたところがある。

③ニコライは日付をその日の日記の最初に記しているが、本書では、日記の引用の後にその日付を（ ）のなかに算用数字で小さく示した。

たとえば、(1882.2.13/25)。これは「ロシア暦一八八二年二月十三日 西暦二月二十五日」を示す。ニコライは、ロシア滞在中の日記にはロシア暦の日付のみを記している。

なお、ロシア暦（ユリウス暦）を西暦（グレゴリウス暦）に直すには、十九世紀では十二日、二十世紀以降は十三日を加える。

④引用文のかなづかいは、現代かなづかいで統一した。

## はじめに

一八五五年二月七日（安政元年十二月二十一日）、伊豆下田で、日本とロシアとの間に日露通好条約が結ばれた。その条約にしたがって、一八五八年十一月、初代駐日ロシア領事ヨシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチが、家族や医師などをふくむ十五人で、開港された蝦夷えぞの箱館はこだて（函館）に着任した。夫人エリザヴェータ・ステパーノヴナもいっしょだった。

ゴシケーヴィチは司祭の子で、ペテルブルグ神学大学在学中に、後にロシア正教会の第十二次北京宣教団の団長となるポリカルプと知り合い、一八四〇年から一八五〇年まで十年近くもロシア宣教団（団員約十名）の一員として北京で働いた経歴を持つ。その後ロシア外務省に移り、一八五三年プチャーチンが率いる使節団の中国語通訳としてすでに日本へ来ており、伊豆戸田村へだに滞在したことがあった。

箱館の初代ロシア領事となったゴシケーヴィチは、領事館付属教会の司祭の派遣をロシア帝国の宗務院（シノド。ロシアのすべての教会、修道院を管理する官庁）に要請した。